

〔解答・解説〕小説・詩歌編 みどりのゆび

漢字（基本）

- 1 (1) あわ (2) きしょく (3) つど  
(4) じょうちよ (じょうしよ)  
(5) かぎ (6) すで (7) にく
- 2 (1) 改札 (2) 憤 (3) 気配 (4) 迷惑 (5) 結束  
(6) 洪水 (7) 濃 (8) 意識 (9) 滴 (10) 彩  
(11) 余裕 (12) 根拠 (13) 扱 (14) 清潔 (15) 茂

語句・漢字・表現（発展）

- 1 (1) あれこれする。何やかやとする。  
(2) 祖国を同じくする者どうし。同じ国民。同じ民族。  
同じ母から生まれた兄弟姉妹。はらから。  
(3) 意識がぼんやりして、夢か現実か分からないこと。  
(4) ぼうっと薄くかすんでぼんやりとしているさま。  
(5) 事の取り扱いが乱暴でいいかげんなさま。
- 2 気色（けしき）・人氣（ひとけ）など
- 3 解・溶
- 4 隠喩（暗喩）
- 5 体言止め
- 6 生計（生活）  
(1) 擬人法
- 7 (2) シクラメンを自分と同等の生き物として見ていること。
- 8 (1) 陽  
(2) 得
- 9 (1) 擬・疑・凝 (2) 懐・壞 (3) 縁・緑
- 10 ① 激（著・甚だ） ② 強調 ③ 明るさ
- 11 (1) 彼はしきりに後ろを気にしている。  
(2) あまりの疲れに、立つことすらできない。  
(3) ゆくゆくは父親の跡を継ぐ予定らしい。  
(4) 駅では大勢の人が家路を急いでいた。  
(5) 泥にまみれてサッカーの試合をした。

読解

第一段

## 1 アロエ。(または、この時点では分からない。)

【解説】第七段まで読み進んでいった時点で初めてここでの「誰か」がアロエを指していることが分かるようになってきている。初読の段階では「分からない」も正解。むしろ、これが小説の「仕掛け」となっている点に留意したい。

## 第二段

### 2 エ

【解説】第二段の時間は「去年の冬」を中心に進んでいくが、その中に回想場面を含むため、多少複雑な面もある。アは、アロエが家に来る契機であり、「去年の冬」以前。ア以外は時間軸として「去年の冬」に位置づけられるが、「その時」は「いつもの夕方」がはじまろうとしている。「七・12」る「その夕方」における瞬間であり、その後のアロエの成長（生長）を述べているウは該当しない。イとエとはその特定の瞬間を示しているが、今でも「よく覚えている」という衝撃の強さに合致する出来事としては、身内の生死に関わるエが最適である。

### 3 ①テーブル ②いろいろなこと ③歴史(歩み、も可)

【解説】比喩的な表現が意味する具体的な内容を捉える問題。本文を丁寧に読めば①と②は容易だろう。後は③で、家族のみんながいろいろなことをしてきたということ、家族の〇〇と言い換えられればよい。

## 4 祖母の病気が手遅れであり、助かる見込みがないということ。

【解説】「手術」は一般に治療目的で行われる。それが行われないということは、治療の必要がない(病状が軽い)か、治療できない(病状が重い)かのどちらかである。「もう」という語からは、手遅れといった意味を読み取ることができるため、ここでは後者。

## 第三段

### 5 病院の居心地の悪さ。(10字)

【解説】「早く帰りたいと思うが」「九・13」に続く「慣れる」であるから、その理由である「居心地の悪さ」が答えの核となる。更に字数に余裕があるため、「病院の」という修飾語も付しておく。

### 6 ウ

【解説】アとイは、自分が死ぬことを想定していないという点で現実離れしており×。特にイは「本当に」が付いており論外。極端な修飾語は疑ってかかるべきである。「考えたくない」というわけではないのでエも×。頭の片隅では、生き物は必ず死ぬと知りつつも、人々は日常が永遠に続くように考えてしまっているという趣旨のウが正解。

### 7 (1)死の世界(四字)(と)生の世界(四字)

### (2)死に近い病院での生活と、生気あふれる日常の生活の両方を知っているか。

【解説】「死の世界」のことは、直前のオルフェの挿話を踏まえている。だが、そもそも、祖母が入院している病院の世界と、人や車があふれ返る雑踏との対比が根底にある。死の世界と生の世界は、お互いを忌避する傾向にあるが、「私」は両方の世界を頻繁

に行き来しているのです。」どちらも慣れてしまえば同じこと」という考え方が出てくるのである。

#### 8 その植物たく気がした。(三一字)(一一・一)

【解説】指示語の問題。直前に「打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた。だからそう思った」「一一・七」とあるのだから、祖母に対する植物の気持ちのようなものを「私」が感じ取っている箇所を探せばよい。該当箇所が少し離れているので注意深く読む必要がある。

#### 9 ウ

【解説】祖母がしだいに衰弱していくことが述べられた部分に続く一文であることに注意。「人間がずつとくりかえしてきた営み」とは人の生死を意味している。ウが正解。アは食事と睡眠、イは親たちの世話、エは植物の世話、という点が誤り。

#### 第四段

#### 10 それまで見えていなかったものがいろいろと見えてくるようになるというところ。

【解説】指示語の問題でもある。「時間ができる」ことに関して直前にも「時間ができたら少し違って見えてきた」「二三・九」という部分がある。直接的には「そういうこと」はシクラメンに対する認識が変わってきたこと、具体的には「あの茎は…: 退屈しないのよ。」「一三・一〇」という部分を指す。ただし、そこから「時間ができる」シクラメンに対する認識(見方)が変わる「ことだとするのは狭すぎるので一般化して答える。それは「少し違って見えてきた」とも合致する。

#### 11 (1)あの世(死後の世界・彼岸)

(2)既に自らの死を受け入れ、死後の世界を身近なものと感じる気持ちが表れている。

【解説】生死が問題となっている状況での「こっち」「あっち」であるから、「彼岸」と「彼岸」、つまりはこの世とあの世の対立として考えられる。「あっちでは…: 自信がついたわ。」という口調からは、既に自らの死を受け入れていることが読み取れる。

#### 第五段

#### 12 植物の気持ちを理解する「とができる」と。(二〇字)

【解説】指示語の問題。直前の祖母の言葉(アロエの代弁)を受けての発言。「誰かの言葉を聞き取るかのように」「二四・一四」がヒントとなる。

#### 13 祖母のささやかな人生「二五・一二」

【解説】該当部分の主語は「これ」「二六・四」。「ひとりの人が生きてきたあたりまえの足跡」「二六・四」と同じ内容。具体的には直前に描かれた祖母の部屋のありさまを指す。更に遡れば、それらを「祖母のささやかな人生」と表現した箇所にとどり着く。

#### 14 アロエの生きようとする姿。(二三字)

【解説】指示語の問題。「泥にまみれたアロエは生命の力を発散していた。」「二六・一三」、「ただひたすらに生きてあちこちに根をはり、葉を広げていた。」「二六・一五」という姿を直接的には指す。これを一五字以内にまとめる。

## 第六段

### 15 あんたは植くめなさい。〔二二・一四〕

【解説】「私」のここでの発言を受けて、父が「そこで花屋をやるといい」〔二七・七〕と答えているのだから、第四段での「あんたは植物の仕事が合ってるわよ。」という発言が思い起こされるだろう。後はこの文を含む発言全体を答えればよい。

## 第七段

### 16 なんとなく〔二八・七〕

【解説】「気配」を表現している部分を探す。この「気配」が次の瞬間には祖母の幽霊が見えることを期待させるが、その正体はアロエなのであった。冒頭の「誰かの気配」〔六・一〇〕に通じる。

### 17 生きている喜び（七字）〔二八・一五〕

【解説】「言いたそう」と同様の語句として「伝えよう」が直後に見られる。ここでの目的語、つまり「生きている喜び」を解答とする。

### 18 (1)家族のテー〔二七・一四〕

【解説】植物に関する意識の変化が明確に描かれた部分を探す。「アロエの生命をぞんざいに扱える幼いかわいい私にはもういくら振り向いても戻れなかった。」という箇所が条件に該当する。現在の自分は、決して過去のようにアロエ（植物）の生命をぞんざいに扱うことなどできないというのである。

### (2)祖母の言葉（祖母の遺言）は△・祖母の部屋の植物たち

【解説】「植物の仕事」を勧めた「祖母の遺言」の影響も大きいが、「私」を直接的にゆさぶったものは、アロエの代弁をした言葉である。よって「遺言」は△。また、アロエの代弁を聞いた後に立ち寄った祖母の部屋で見た植物たちによって「私」は楽になり、家のアロエを助けることになる。

### (3)以前は全く植物に無関心で残酷であったが、現在は植物を愛し、ともに生きていく決意を固めている。

【解説】(1)で捉えた、「無邪気」「幼いかわいい」と評された「以前」と、それとは対照的な形での「現在」とを、それぞれ説明していけばよい。

旅先での「私」は、「①冬」のはりつめた空気を感じて、ホームに降りた。タクシーに乗り、目指す宿の近くで降りてもらって、細い坂道を登って行くと、前方に「②知っている誰か」の気配を感じた。

生まれ育った家の「③小さなテーブル」を囲んでいた時、「④父」が玄関脇の、育ちすぎた「⑤アロエ」を引っ抜いて捨てると言いつ出した。そこへ母が帰ってきて、祖母が「⑥末期の子宮癌」であることを告げた。

祖母は病院で部屋に残してきた「⑦鉢植え(植物)」たちのことを気にかけていた。「私」は、毎日それらに「⑧水やり」をしにいつて、祖母の「⑨死」を考えていた。

祖母は、「私」に「⑩植物の仕事」に就くことを勧める。祖母は、嫌いだった「⑪シクラメン」も好きになったから、「⑫あっち」では育てることができると、自分の死期を悟ったようなことを「私」に告げる。

祖母の意識がほとんどなくなったある日、祖母がふいに「⑬アロエ」が、切らないで、って言ってるの。」と言った。そして、「植物は「⑭仲間同士」でつながっているの。」とも言った。看病を交代した後、祖母の部屋に「⑮水やり」に行った時、「私」は、死は悲しくも苦しくもない、どちらかといえば「⑯幸せないいもの」だと、植物たちに教えられたような気がした。

祖母が亡くなった後、「私」は「⑰祖母の遺言」に従って、花屋を開くための勉強を始める。

旅先の山道で、「私」は「⑱何か」の気配を感じる。それは、「⑲アロエ」だった。「私」は祖母から受け継いだ「⑳みどりのゆび」を実感して、人と「㉑握手」をしたあとのように元気になって、山道を登るのだった。